

R18

義兄の

狂愛

嫉妬と独占欲
義兄に彼氏におっぱいを吸われて
喘いでいるのを見られ、
嫉妬から処女を奪われる

箱庭の樂園

あらすじ

初めてできた彼氏と家でいちゃいちゃしていると、
母親の再婚でできた義兄の涼が突然帰宅した。
まゆが彼氏におっぱいを吸われて喘いでいる姿
を見た涼は豹変し、まゆの処女を奪い、
倒錯した欲望をぶつけるようになるのだった。

涼 29才

外資系金融機関勤務。
まゆの母親の再婚相手の息子。
幼い頃からまゆを溺愛。
外面はよいがサイコ気質の変態。
まゆのことを所有物だと思い込んでいる
アブない人。
まゆの体に異常に執着している。
好きな作家は団鬼六。



まゆ

彼氏と自宅でエッチなことを
しているのを涼に見られて
嫉妬からそのまま処女を奪われる。
以後、毎晩開発されて涼なしにはいられない
体。真面目だが無自覚な淫乱体質。
自己肯定感が低く流されやすいチョロイ
ン。

義兄の狂愛

Presented by 箱庭の楽園

プレイ内容

①不純異性交遊を咎められスパンキング
指入れ処女確認

②浴室にて
乳首責め クリ責め
剃毛 クンニ ローション素股

③乳首責め クリ責め 処女強奪

④義兄宅にて軟禁生活 裸体撮影会 脳イキ
クンニ 生挿入 中出し

⑤放置プレイからの自慰強要&溺愛セックス

⑥玩具挿入 フェラ 生挿入 ポルチオ開発
潮吹き 中出し
など

おまけSS
まゆ女子大生編
目隠し緊縛&オイルマッサージ

義兄の狂愛

Presented by 箱庭の楽園

義兄の狂愛 サンプル版

三章 浴室にて

「シャワー浴びようか」

確かに汗やらなにやらで汚れている。

涼に抱きかかえられて、浴室へ向かう。

「自分で脱げるから！」

「駄目だよ。まだ確認が終わってない」

一体なにを確認するというのか。

脱衣所でぼうつとしてしていると、涼まで脱ぎはじめた。一人で入ると思っていたので驚いて聞いてみる。

「ど、どうして」

「まゆちゃんの体、洗うよ。あいつの唾液がついてるし」

和也に胸を舐められたことを言っているらしい。

まゆの服を脱がし、ブラを外すと胸の周りを撫でた。

「あ、噛み痕。童貞は駄目だね。加減を知らなくて。痛かったでしょ。僕が帰らなきゃろくに前戯もしないで、突っ込まれてたよ」

さっきまゆを打ったことなど忘れたように和也への非難を呟いている。

まゆが望んだことではないのに、男二人からされた横暴を責められ、その理不尽さに落ち込んできた。

「涼くんに叩かれたところも痛い」

「ん、お風呂から出たら軟膏塗ってあげるから」

しれっと呟いた涼がボクサーショーツを脱ぎ捨てると、凄まじい大きさの

それが天に向かってそそりたっているのが見えた。

禍々しいほど卑猥なそれを見て、思わず目を疑った。

——これはなに？

「どうしたの？」

「な、なんでもない」

見なかった振りをして、そのまま浴室に入る。

さつきからずっと異常な状況だが、なんだかもう抵抗しても無駄な気がして流れに身を任せることにした。

「昔みたいに洗ってあげる」

熱いシャワーを頭からかけられ、シャンプーをされる。美容室以外で人
頭を洗われたことなどない。

ごつごつとした大きな手が、頭皮を優しく撫でる。

——気持ちいい……。

明らかに異常な状況なのに、その指の動きに陶醉してしまふ。

「気持ちいい？」

「うん……」

頭を熱い湯で洗い流されると、頭が少しすっきりする。

「体も洗うよ」

「えっ！ 自分でやるからいいっ」

「駄目だよ。きれいにするから」

体中にソーブを塗りたいくらい、胸の裾野から持ち上げられる。

「ここ膨れてるのあいつに吸われたせい？ まゆちゃんがそんなに淫乱だと

思わなかった。鏡見て」

風呂場にある鏡には、確かにぶつくと腫れた乳首が映っている。

後ろに立った涼が、体に手を回す。

「ごめんなさい……許して」

「もうしない？」

「しない、しないから」

泡だらけの胸を大きな手が上下して擦る。敏感な中心に触れそうに触れないのが逆に卑猥に感じて、吐息が荒くなってしまう。

「どうしたの？ はあはあして」

「そこっ、自分で洗うからいい」

「触ってないのに、勃ってるね。期待してない？」

「んんん……っ」

胸の周りを洗っていた指が、乳輪にまで近づいて、乳首を軽く弾いた。泡のせいで摩擦がほとんどなくて、乳首の上を何度も指で擦られた。

「いやあ、やめて」

「しっかり洗わないと駄目でしょ」

くりくりと刺激され、立っているのが辛くなる。

「ここ、吸われたの今日が初めて？」

「う、うん」

「はあ……やっぱり許せないな」

そう言いながら、涼はまゆの乳首をつねった。鋭い刺激にのけざると、後ろから抱き止められて、体がより密着した。

「まゆちゃん。いつまでも幼いままだと思ってたのに。こんないやらしい体の子と二人きりになったら襲うに決まってるでしょ？」

そう言いながら、顎を掴まれ唇を塞がれた。呼吸もできないような激しいキスだった。

「うっ。ふぁっ……」

舌を引きずり出して、きつく吸われると蕩けそうになる。

頭がくらくらするのは、浴室に張られた湯から出る湿気や熱気のせいだけではない。

——私の舌が、涼くんの口の中に……。

そう思うと、なぜか腹の中がきゅんとして、足の間が濡れてくる。

舌を歯で挟まれて、緩急をつけて吸われると酔ったように頭がぼうつとしてきた。

「はぁっ……。やだぁ！」

「どうして？ 蕩けそうな顔してるのに」

口を塞がれたまま、石鹸でぬるついた胸の裾野や、脇下をくすぐるように触れられ、我を失い喘いだ。

「下手な男は、いきなり胸やら股間を触るんだけど、女の子の性感体は、全

身なんだよ」

囁きながら、耳たぶを唇で挟まれ、体に弱い電気が走ったような感覚がした。

柔らかく唇で刺激しながら、耳の輪郭を舌でなぞる。

「指だって、感じるんだよ。やり方次第で」

泡にまみれた手指の股を一本一本なぞり、耳元で囁きながら、最後は舌を耳穴に突っ込まれた。

脳内を犯されたような音と、涼が体を洗う音でいつもの浴室が非現実的なものになった。

「ふえ……もう許して……」

触れられるだけで、脳が蕩けそうに気持ちいい。耳の中に淫らな水音が響く。

足元から崩れ落ちそうになるのを後ろから抱き止められると、腰に熱くて

硬いものが当たっているのがわかる。

「全身、洗ってあげる」

浴室のチェアにまゆを座らせ、床に膝をついて足の先までゆっくりと泡を馴染ませ洗いはじめた。

優しく弱い刺激でも、人に本来触られることなどない場所だから、敏感だ。

「ああん、指の間いやあ」

「くすぐったい手前くらいが気持ちいいんだよ。僕が教えてあげるからね」

足の指の間を、涼の指が入ったり出たりする。洗っているといえは洗っているだけだが、ひどく卑猥なことに見える。

くすぐったさに、足を動かすと、秘めなければいけない部分を見られてしまう。

「あっ、は、恥ずかしい」

「恥ずかしくないよ。昔も一緒によく入ったし、体も洗ってあげたし」

「でも、それは……」

まだ幼稚園か小学校低学年の頃の話だ。

「ふくらはぎも洗うよ」

そう言っただけなのに洗われ、太ももまで触れられると、必死に足を閉じた。

「そこまでいい」

「ん、太もも、ぬるぬるしてるけど、これなに？　まだ石鹸つけてないよね」
足の間を覗き込まれて、尋問される。

「せ、石鹸のせいだもん」

「嘘つき。まだここにはつけないけど、一回流そうか。泡がここに入ったら染みるものね」

秘部にシャワーを直接かけられてしまう。水圧が絶妙で、まゆは喘いだ。

「シャワーで気持ちよくなる女の子もいるみたいだよ。したことある？」

「ない、ない」

「じゃ、別の方法でしたことは？」

「……」

「……あるんだ。やっぱり悪い子だね。どうやってしたの？」

時々どうしようもなくなつて、涼を想像して自分を慰める夜があった。

一人でしたことがあるなんて言えない。しかも涼を想像してしたことがあるなんてもつと言えない。

「そう……言えたらやめてあげようと思ったのに。まゆちゃんみたいな淫乱には、もう少しお仕置きしたくなるな」

涼が後ろに回り、椅子に座ったまゆの足を鏡に向かって思いきり開く。

自分でもそんなにきちんと見たことのない部分だった。羞恥のあまり、正視できない。

「見ちゃやだあ」

「自分でここ弄ってるの？　この小さな粒。ちっちゃくてかわいいけど、敏感だよね」

「ないっ。ないからやめてえ」

指でくりくりといじられて、まゆは腰を揺らして耐えた。

「ちゃんと見て。皮かぶってるの、剥いてみようか」

自分の体がどうなっているかなんて知らない。

「あっ！」

二本の指で、押すように圧迫すると赤い身が出るのが鏡越しに見えた。

「直接触るよ。敏感なところだから、まゆちゃんの愛液で濡らしてからね」

割れ目に手をやり、指を濡らしてから、そこを円を描くようにゆっくりと撫でた。

「ひあっ。やあん」

「まゆちゃんは今危機感が足りないから、少し勉強が必要じゃないかな」

涼が肉襷を左右に開くと、慎ましい入り口が鏡越しに見えた。

「中もピンクなんだ。こんなにいやらしい体して、本当にいけない子だね」

「ああん、ああんだめえ」

敏感なところを執拗に撫でられると、中からぬるぬるとした液体が溢れて、わけもわからず腰を揺らしてしまった。

鏡越しに、うっとりと秘部を眺める涼の目に狂気を感じ、まゆはぞわりと震えた。

そもそもこの状況がおかしい。

不純異性交遊するなど言いながら、涼はまゆを好き放題にしている。

叱るだけなら、浴室で丸裸にして体をいじり回す必要などないからだ。

「いや……！ 怖い！」

逃げだそうとすると、ぐっと手首を掴まれた。まゆの知らない男の力だっ

た。

「やめて！ どうしてこんなことするの」

いつもは優しい義兄だ。だからこそ好きで、諦めきれず、別の人を好きになろうとした。

それなのに。

「一回イっておこうか？」

「ふえっ？」

床に跪いた涼が、まゆを無理やり立たせて、自分の顔の前にまゆの股間が来るようにした。

恥毛を掻き分けて、小さな粒を探しだすと、再び皮を剥いた。

「はー、まだ小さくてかわいい。ここ吸ってあげようか？ ん？」

「な、なに言ってるの」

涼の正気を疑う。

首を振るが、腰を腕で固定され、涼は敏感な部分に狙いを定めて舌を絡め

た。

「嘘っ……」

「んー、硬くなってる。体洗われて、興奮した？」

「ああん。やだあ、吸わないで」

「中からどんどんぬるぬるしたの出てきてるよ」

割れ目からこぼれる蜜に舌を伸ばし「ごくごく」と飲み干すと、再び突起を吸いはじめた。

狭い浴室に涼がちゅうちゅうとそこを吸う音だけが響く。

「はあっ……はあっ。いやああああ」

中に指を出し入れされ、音が一層激しくなる。

指を曲げ、まゆの弱いところを探そうとしている。

「ほら、ちゃんと言って。くちゅくちゅされるの好きだって」

「好きじゃないい」

「じゃ、なにが嫌なの。ちゃんと説明して」

「ま、まゆのそこ舐めないで……」

「そこじゃわかんない」

体内に入ってきた涼の中指が、まゆの弱点を探りあげた。

「あ、ここだね。押すと中が締まる」

涼が中指で内部を押すように刺激しながら、舌での愛撫に集中しだす。

「んっ！ あ！ やあー」

たまらず体をのけぞらせると、空いた手で腰を引き寄せられてしまう。

「あー、すごい。お漏らししたみたいだ」

太ももにまでべったりと愛液が垂れているのが自分でもわかる。

ここまで来るとまともに頭が働かなくなってくる。

恥ずかしいところを見られ、舐められて未知の快楽を与えられ、正気を失

っていた。

——気持ちいい……。

無意識に腰を揺らし、涼の唇に押し付けていると、目が合い、我に返り、

動くのをやめた。

「いいんだよ。気持ちいいのは悪いことじゃない。体がしたいようにしてらん」

「は、恥ずかしい……」

自分でも動いていると、なにかが近づいてくる気がして、それがなんかのかわからないままに、快楽に身を委ねるしかできなかった。

「気持ちいい？」

「ああん。やだあ、はっ……あん」

「やならやめる？」

「いやあ。ふあっん」

「わがままだなあ」

涼が指の動きを早め、唇でクリトリスを転がしながら、きつく吸引した。コロコロと転がされるたびに、景色が歪む。

「あつ、あーっ……」

「……イっちゃったね。感度がいいだけにこれからも心配だな。無理やりのに感じちゃうなんて」

凄まじい快楽が下腹部に広がり、がくがくと痙攣しながら浴室の床に倒れ込んでしまう。

涼は、それでもそのまま、まゆの秘部に吸い付いていた。

慰めるようにいたわるように、愛しそうに愛撫を続ける。

ひどく敏感になったところを舌で触れられるたびに、体が跳ねる。

体の力が抜けきつて、もはや恥じらう気力もなく、だらしなく足を開いて、されるがままになっていた。

「全部飲みたい、舐めたい」

溢れた愛液を一滴残らず舐めとる。達したばかりで敏感だというのに、容赦なくしばらく舐め続けた。

ようやく唇が離れて、安心する。これでもう終わったのだろう。

「彼氏にされるのとどっちが感じる？」

「感じてないっ。くすぐったくて声が出ちゃっただけ」

認めたらなにをされるかわからない。本能的に恐怖で嘘をつく。

「ちゅうちゅう音がするほど吸われたら仕方がないね。まゆちゃん、抵抗もしないであんあん喘いで、機会があればまたするでしょう」

「もう……しないっ」

「ほんとかな。ちゃんと反省してる？」

こくこくと頷く。涼は満足そうに微笑んだ。

「じゃ、証拠見せて」

「証拠？」

「うん。ここを剃ろう。そしたらもう彼氏に見せられないでしょ？」

涼が恥毛をそつと撫でる。

——剃る？

意味がわからない。

恐ろしいことを言っていることだけはわかる。

「ここ、どうしたのって聞かれて、自分で剃ったなんて言えないでしょ？ 変態みたいだもの。まして誰かにされたなんて言えないからね」

「や……怖い！」

「んー、怖くないよ。大丈夫。じっとしてて」

一度浴室から出ると、なにかのチューブと剃刀を持って戻ってきた。

「肌傷めないようにローションつけるからね」

浴槽の淵に座ったまゆの足を開かせる。

冷たいジェルをかけられ、快楽の余韻で熱をもったそこが一気に冷たくなる。

涼がもっている剃刀が怖くて、目を閉じた。

「ひあ……」

刃の当たる感触が恐ろしくて、動かないよう体が緊張して強ばる。

「ふふ。大丈夫だよ。こう見えて手先は器用だからまゆちゃんを傷つけたりしない。でも、ちよっと複雑なところだし、じっとしてね」

絶頂を迎えたばかりの秘部に、冷たい刃が当たる。

「はっ……っん。やあ」

じよりじよりと、体毛が剃り落とされる感覚は鮮烈で、体中に鳥肌が立つ。

恐怖からか、感度が跳ね上がり、ちよっと触れられただけでびくんと体が波打つ。

「かわいそうに。怖いんだね。震えてる」

「なんで……」

薄目で下を見ると、すでに半分ほど終わったようで、隠れていた部分が晒されている。

「丸見えにしちゃうからね」

執拗な手つきで、一本残らず剃り落とすと満足そうな顔をしている。しばらく恐怖に耐えていると、ようやく刃物が皮膚から離れた。

刃物を当てられた恐怖に泣きだしたまゆを優しく抱くと、

「うっ」

「よしよし。よく頑張ったね」

「今日の涼くん怖い」

「ごめんね。かわいいまゆちゃんが他の男に抱かれると思うと耐えられなくて。毛がないほうが、よく見える。それに舐めやすいし」

恐る恐る、舌を見ると幼児のようにつるつるになっている。

涼がローションをそこに塗り足してから、そそりたったものをまゆの秘裂に押し付ける。

「え……」

——犯される。

そう思ったが、割れ目をなぞりながら、秘裂の上を擦るだけで中には入ってこない。

「挿れると思った？　大丈夫だよ。初めてがお風呂じゃちょっとかわいそうだし。あとでゆっくりベッドでしょうね」

意味不明なことを言いながら、体を揺らしている。

たつぷりと塗られたローションのせいで、粘着質の水音が響く。涼はまゆの両胸が歪むほど激しく揉んで、指の間に乳首を挟む。

「ローションなんていらなくらい、ぐちよぐちよだね」

「ん……っ！　ひっ……！　あああっあう……」

「ほらっ。見て、どうなってる？　説明して」

「あ……涼くんのおっきいのが当たってる……」

粘膜がこすれるたびに、涼の先っぽからも透明な液体が垂れてきて、まゆの秘裂に垂れてくる。

鮮烈な刺激に、まゆはがくがく痙攣しながらむせび泣いた。しばらくそうしていると、涼の動きが激しさを増す。

「はっ、すごい。ビラビラに挟まれてるだけでイキそうなくらい気持ちいいよ。クリに当ててあげるからね」

「あ、はあ……あーっ。そこに当てちゃ……ひあん」

「僕の先っぽでまゆちゃんの敏感なここにちゅーしてあげる」

「ひあっ……あうっ」

先走りに濡れた亀頭をまゆのクリトリスにくつつける。

互いの一番敏感な部分が直接交わる感じが卑猥すぎて眩暈がする。

「こっちでちゅーするのも気持ちいいね」

「あ、りよ、涼くん……駄目えええ」

「興奮して皮から出てるの見える？」

「さ、さっきいっぱい吸ったから……」

普段は小さくつつましかなクリトリスがほんの一時で、膨らんで露出してしまっている。

あまりの恥ずかしさにまゆは顔を手で覆った。

先ほど口でさんざん吸われたから、刺激が辛い。

赤黒い男根は、まゆの体液とローションでぬらぬらと光っている。

初めて見るそれは、想像より大きさも長さもすぐくて、とても受け入れられそうにない。

「ああ、いいよ。まゆちゃんのひくひくしていやらしい。挿れたらどうなるんだろう」

「あ、ああん。うっああ」

涼は、恍惚とした表情で一心不乱に腰を振っている。

先ほど絶頂を迎えた体は、再び高みを目指して熱くなってくる。

「クリ擦らないでえ。またイっちゃう……」

「うん、今度は一緒にね？」

ちゅっとまゆの口にキスをして、そのまま腰の動きが早まる。興奮して剥き出しになったクリトリスを容赦なく亀頭で刺激され、頭の中が白み始める。

「はぁーッ…やあ、もう苛めないで。怖いッ」

まゆは再び絶頂した。

「あ、かわいい、まゆちゃん。ああ、僕も出すよ」

お腹の上に白い飛沫が飛び散り、浴室に男の匂いが漂う。

口の中を舐るように舐められているうちに、ゆっくりと意識が遠ざかる。

五章 奪われた処女

浴室で乱れに乱れて立てなくなったまゆを運び、涼は部屋に運んだ。
出会った頃を思い出して感傷的な気持ちになる。

濡れた体をバスタオルで拭き取り、ベッドに寝かせると、まゆの部屋から
スマホの着信音がした。

涼がスマホを見ると、ポップアップにまゆの彼氏からのメッセージが映る。

「さっきはごめん……。好きだからついやっちゃった。我慢できなかった。
お兄さん怒ってない？ 大丈夫？」

涼は、スマホを放り投げ、まゆのもとへ向かった。

まゆが男を作るなど、まだ先だと思っていて、油断した。

女子高だし、母親に厳しい躰をされていたから、バイトもできずに出会いもないと思っていた。

成長しどんどん女らしくなっていくのを見て、いつかは自分のものにしたという欲を抑えに抑えてここまでできたのに、あっさり男を作り抱かれそうになっていた。

彼氏に胸を吸わせて、下着を濡らしていたまゆ。

家族でもある以上、半端に手を出すのはよくないと我慢してきたのに、あんな現場を見せられて正気でいられるはずがない。

大切に何年も待っていたのに、あんな小僧に持っていかれるところだった。嫉妬に狂って、欲望をぶつけたが、後悔はしていない。

少し早まったが、いい機会だった。

彼氏が好きだろうと自分のことを男として見ていなかろうと、まゆを渡す

ことはできない。

彼氏でなくても気持ちよければ体はちゃんと反応するのだ。

これから力づくで体に教え込むしかない。

まゆの気持ちなんぞどうでもいい。

今夜、まゆを自分のものにする――。

涼はそう決めた。

☆

目が覚めると、自分のベッドで寝ていた。

いつもと違うのは、涼が隣にいることだった。

「起きた？ 抱っこして連れてきたんだよ」

「あ、あの……」

先ほどした行為は一体なんだったのか。

聞きたいが聞けない。見ると。パジャマも着せてくれたようだ。

「まゆちゃんの感度がすごくて、びっくりした。ちよつとやりすぎたけど仕方がないね」

「仕方がない？」

あれだけやりたい放題しておいて、どういう感覚をしているのか。

「まゆちゃん、思ったよりいやらしい体してるから、このままじゃすぐ誰かにやられちゃうと思うんだ」

「え？」

「だから、そうなる前に抱くことにした」

「な、なにを言っているの」

涼はいつも自分の前では優しく、怒った顔すら見たことがない。だから今日自分に働いた無体がまだ信じられずにいる。

母親に怒られそうな時も、いつもかばってくれていたというのに。

「義妹なんてさ、他人なんだし何の問題もない」

「も、問題あるよ」

「むしろ今まで耐えてた自分を褒めてあげたい」

「褒めるとこじゃないでしょ。むしろ後悔して！」

こんなことが両親に知られたら、ただで済むはずがない。

そんな涼が意味不明な台詞を吐いて、やわらかなキスをおでこや頬に繰り返す。

「こんなことだめだよ」

「なんで？」

「涼くんは私のお兄さんでしょ。彼氏とするよりおかしいよ」

「そう……男として見れないって言うなら、記憶を上書きしてもらっしかな

いな」

拒否すると涼が獲物を狙う獣のような目が変わる。起き上がり、服を脱ぎ捨てると、筋肉質の体が露になる。

昔から文武両道で、勉強もスポーツもできる涼はまゆの自慢だった。涼に女性の影があれば嫉妬もした。

鍛え上げられた筋肉の美しさに改めて目が釘付けになる。

盛り上がった上腕二頭筋などは、美しいというよりいやらしさまで感じる。一気に心拍数が跳ね上がる。

「そんなに見てどうしたの」

「み、見てないったら」

慌てて目を反らす、再び上にのしかかれて、息もできない程に抱きすくめられてしまう。

抱き寄せられると、分厚い胸板を直に感じて、ときどきする。

異性として涼が好きな気持ちはまだ残っていたが、だからといって今日の無体はあんまりだ。

身体を押し返そうとするがびくともしない。

「好きだよ」

「嘘……」

その言葉はまゆの抵抗を無にしてしまう力があつた。

頬に口づけられ、もう一度好きだと言われると、涼の腕の中で急激に力が抜けていく。

頬や脛にキスされると、ますます力が入らない。
やがて唇同士が重なる。

背中をあやすように撫でられると、それだけで感じてしまう。
首筋や耳を涼の吐息がくすぐり、まゆも小さく声を漏らす。

身体の輪郭をなぞっていた大きな手が胸元の膨らみを捕らえ、ゆっくりと下からもみあげられた。

そのまま押し倒されて。パジャマを胸の上まで上げられてしまう。

剥き出しの乳首が空気に触れて硬くなる。見られていると思うと、意識がそこにいく。

涼は乳首にそっと口づけてから、そっと口の中に含んだ。胸を揉まれ、舌で転がされると中心が芯を持って立ち上がる。

「ここ、1日に二人の男に吸われちゃったね」

「そんなこと言っちゃやだあ、や、やめて……」

二人ともまゆの意思など無視だったのに、そんな言われ方をするのは納得
いかない。

先ほど散々刺激された胸がまだじんじんしている。

一度口を離し、ほぐすように両方の胸を指で摘まんだかと思うと、涼は大きく口を開けて吸い付いた。

柔らかく舌で押したり、唇で挟んだりされると、体が疼いて仕方ない。

「彼氏にされるのと、どっちが気持ちいい？」

「はあっ………！ そんなの比べたくない」

涼だと答えればよかったのかもしれないが、言いたくなかった。涼は躍りになったように、まゆの胸を貪る。

「好きなものは最後に取っておくタイプなんだけど、横取りされそうならすぐ食べたほうがいいかなって」

「そんなに吸ってもなにも出ないからあつ。あー、んっ」

「まゆちゃんのおっぱい、美味しいよ。白くて柔らかくて、先っぽなんか小さいのに感じやすくて」

まゆに見せつけるように、舌で卑猥に舐めあげてくる。

「恥ずかしがっててかわいい。もっと吸うからね」

胸を吸いながらも、手でまゆの秘裂を指で撫でる。くちやりと、卑猥な音がした。さきほど嬲られたそこは、すでに花びらが開き、蜜を垂らしている。

「あ、同時にしたらやだ」

「お風呂であんなに出しちゃったのに、まだえっちな液が止まらないんだね。また飲んで欲しい？」

上目遣いに見られ、先ほど恥ずかしい部分を散々舐められたことを思い出す。

ふるふると首を振る。あんなことをまたされたら、今度こそおかしくなってしまう。

涼は胸から唇を離し、体を起こした。

「もったいないから飲むよ」

「あああーっ」

再び恥ずかしいところをぱっくりと開かされてしまう。

「びらびらのとこ、右のが少し長いね。膨らんで皮から顔出してるね。自分のって見えないから、今度鏡で見てごらん」

「見たくないっ」

じっくり中を覗きながら、他の部分も手で振れたりして、形を確認している。足を閉じようにも力が強くてかなわない。

「見られて興奮してるの？ もっと垂れてきた。無理やりされても感じちゃうんだ」

両足の間に顔を埋め、舌を絡めた。

唇をつけると音をさせて、美味しそうに愛液を嚙っている。

左右の陰唇を交互に舐めてから、割れ目の部分をすーっとなぞり、敏感な

突起に触れたかと思うと、また下に戻ってしまう。

あまりのもどかしさに、まゆは自分から足を開いて腰を反らした。

「ふふ、感じてる？」

「か、感じてない。あうっ」

認めようとしないまゆを懲らしめるように、軽くクリトリスに歯を当て口での愛撫に専念し始めた。

体の力が抜け、軟体動物のように芯を失って、体が溶けてしまいそうだった。

「あー、まゆのそこに舌入れちゃいや。クリも吸わないで」

抵抗虚しく長い舌が体内に出たり入ったりして、時々思い出したように敏感なところに吸い付いてくるから、もうたまらない。

「ふあっ。あッ。あああ」

くちゅくちゅと指も使い追いつめられると、口調が幼い時のようにたどたどしくなる。

「すごいやらしいな。ねえ、どうして昔みたいにお兄ちゃんて呼んでくれないの？」

異性として意識するようになってから、涼くんと名前で呼ぶようにした。

「だって、涼くんはお兄ちゃんじゃないもん」

「うん、でもちよつと呼んで。興奮する。悪いことしてるみたいで」

そんなふうに呼ばれて興奮するなんておかしい。

「もう終わりにして」

「まゆのいやらしいところ舐められてイっちゃうって言ったら、最後までしない」

「な、舐められてイっちゃう……」

最後までしないでくれるならと、羞恥に耐えてその言葉を言う。

「はは。やっぱりまゆちゃんチョロいな」

薄く笑われ、いやらしい言葉を言えと言われ従ってしまった自分が嫌になる。

「びくびくしてるけど気持ちいい？」

「いや、終わりにして」

「嫌なのに僕の頭押さえつけて、もっとしてほしいって言ってるようなものだよ」

もう我慢の限界で理性は飛んでいた。舌が意思を持った独立した生物のようにまゆの敏感なところを這いまわり、離れようとしなない。

複雑な形状を確かめるようになぞったり、穴に入ってきたり、敏感な突起を貪ったりやりたい放題だった。

「はあ……っ。はあ、も、駄目。ほんとにイっちゃうつ」

「ん、いいよ。何度でも気持ちよくしてあげる」

涼の絶妙な舌技に、まゆは涼の顔に押し付けながら絶頂した。

ようやく許されるのだと、ぐったりと横たわる。

これでやめてくれると思った矢先、起き上がった涼がコンドームをつけ、そりたったものをまゆの下腹部に押し付けた。

「さ、最後までしないって」

だからあんな恥ずかしい言葉も言ったのに。

『まゆのいやらしいところ』って言葉が抜けてたから駄目。大丈夫だよ、優しくするからね」

言い終わると同時に、熱くて大きなものが侵入してくる。騙されたのだと知るが男の力で押さえつけられてはどうしようもない。

めりめりと粘膜が広げられ、内臓が圧迫される気がした。

「あー、さすがにキツイね。処女って嘘じゃないのかな」

まだ半分も入っていない。ゴムごしにも熱い体温を感じて、粘膜がヒリヒリとした。

「これで半分」

「怖い。こんなの入らなっ」

すでに奥まで犯されている気がする。

ゆっくりねちねちとしたら動きで、確実にどんどん入ってくる。

「奥のほうはさ、じっくり開発するから。まずは入り口のとこ擦るね」

「ひあっ？ あっ」

入り口の少し先にある感じやすいところを見つけると、エラの張った亀頭でぐりぐりと刺激し始めた。

「Gスポットっていうんだよ。ここ。今度教えてあげるから自分でもいじってみて。もうしてるかな」

恐ろしいことを言いながら、まゆのお腹を上からさする。

まだひりついた痛みが強いが、ゆっくり動かすたびに体が馴染んでいくのがわかった。

「少し出血してるね。疑ってごめん。まゆちゃんがあまりに感度がいいからさ。初めてなのに彼氏じゃなくてごめんね。でももう渡さないから」

合意もない行為で、涼に初めてを奪われてしまった。

彼氏である和也への申し訳なさと、罪悪感が募る。

なによりこんなめちゃくちななことをされて、体が反応し、悦んでしまっている。

情けなさにほろりと涙を流す。

胸をやわく揉みしだかれたかと思うと、乳首をきゅっと摘まれる。

「ふふ。こうすると締まるんだ。連動してるんだね」

「そ、そんなの知らないっ」

涼の腕に爪を立てて首を振るが、涼の動きがねちっこさを増してくる。

「ん、ちょっと我慢してね。力抜いて」

「あーっ、だめえ」

ゆっくり動きながら、右手で乳首を、左手でクリトリスを円を描くように撫でられると、わけがわからなくなつて髪を振り乱す。

あまりの気持ちよさに、もうどうでもよくなつてきて、淫らに涼の腰に足を絡めてしまふ。

「は……駄目。そんなにあちこちいじったら、いや」

「嫌なの？ 本当に？」

相変わらずまどろっこしいくらいのゆっくりとした動きで、まゆをじわじわと追いつめる。

涼の下腹が自分の蜜でぐっしよりと濡れているのが見えた。

七章 義兄宅にほぼ軟禁

「あれっ？」

バスタオルで体を拭いていると、持ってきたはずの寝間着も下着もない。
嫌な予感がする。

仕方なくバスタオルを巻いた姿で涼に訊ねた。

「あのー、私の寝間着は？」

「なんかくたびれてるから捨てたよ。お義母さん、相変わらずまゆちゃんに
お金かけたくないんだね」

その言葉にぐさつとくる。

再婚相手の父に遠慮してか、母はまゆにお金を使いたがらない。

かといってバイトはしてはいけなと言われ、寝間着だって中学生の頃から同じのを着ていた。

「とりあえず今日はこれで。今度からまゆちゃんに必要なものは僕が買うから」

涼の白いシャツを渡される。

下着まで勝手に捨てたのだろうか。

——でもそんなこと聞けない。

「これじゃ寒いよ」

下も穿いてないないし、色々透けてる。

かと言って着るものもないし、仕方なく素肌にシャツを羽織った。

「彼シャツしてみたかったんだよね」

「え？」

「なんでもない。そのままでもいいでしょ。寒いなら抱っこしてあげるから。」

ブランケットかけるし。さ、テストするよ」

涼と一緒に椅子に座り、後ろから抱きしめられる形で、勉強させられる。耳元で説明されると、ぞくぞくして肌が粟立つ。

きっちり印刷されたプリントには英単語が百問。九十問正解しないとお仕置きとやらをされてしまう。

——ちゃんと覚えたから大丈夫。

ほとんど書けたので、涼に手渡すと、赤いボールペンで丸をつけていく。惜しいな、後一問で合格だったのに」

「そんな……」

「でも、頑張ったし、後十五分で間違えたの全部覚えたら、今日はいいつてことにしよう」

案外甘くてほんと胸を撫で下ろす。十五分あれば覚えられる。

覚えた単語を書いていくと、後一問というところで、手が止まる。

この前されたお仕置きのが、頭から離れなくなる。あの強烈な快楽。もしまた間違えたら……。

シャー。ペンを持つ手が震えてきた。

「どうしたの？ 最後の一個忘れちゃった？」

「あの……お仕置きって」

「もしかして、えっちなことを期待してたの？ 寝るのを少し遅くして勉強増やすって話だよ」

「も、もう馬鹿にして！」

怒って、立ち上がろうとすると、後ろから抱きすくめられた。

「嘘、嘘。ごめんね。あんまりかわいいから、からかっただけだよ。ちゃんと勉強したあと、たっぷりかわいがってあげるから安心して」

「なに言って……」

「彼氏に悪い？　すごい乱れてたもんね」

「私そんなじゃない」

涼と交わってしまったことで、自分の中にまだ涼を好きな気持ちがあると気づいてしまった。

「どうせ卒業したらあの家から連れ出す気だったんだ」

「どういうこと？」

「まゆちゃん、一人だと危なっかしいし、嫌って言えないから悪い男に引っかけかと思う」

まゆの頭に「おまいう」というネットスラングが浮かんだ。

「立って」

「え？」

「立って、そのシャツ持ち上げて見せて」

先程とは打って変わった鋭い声。

頭がくらくらする。逆らえない。

背の高い涼のシャツは、小柄なまゆの太ももの半分くらいまでは隠してくれる。

まゆは、意思を失ったように立ち上がりシャツの裾を持ち上げ、そこを見せた。

「剃ったとこ、一日しか経ってないのに少し伸びてる。また剃ってあげるから」

まゆの前に膝まずくと、吐息がかかりそうな位置からじっと見つめる。

「な、なんで」

「毛がないほうが、舐めやすいし、感度もよくなるし。ね、ボタン外そうか」
シャツのボタンを一個ずつ外すと、胸の谷間が見えて、全裸よりいっそ卑猥な感じがした。

舐めるような視線に、体中が熱くなり、息もあがってくる。

「見られているだけでこんなになるの？ お仕置きされたくて、正解書くのやめた？ ほんととは覚えてたよね？」

涼の視線がシャツの下で硬くなった乳首にいく。

「ブラジャーもサイズが合ってなかったから捨てたよ」

「えっ！ あれしかないのに」

「まゆちゃんのママ、毒親だよね。お金がないわけでもないのに、娘の成長が喜べないんじゃないかな」

言葉に詰まる。

幼い頃、本当の父親から突然引き離されて、涼の家に来た。

母親からはなにも聞かされていないが、仕方なく引き取ったのではないか
と
思っている。

一人ぼっちのまゆに優しくしてくれたのは、涼だけだった。

だからこそ、恋心を押し込めて、家族として接しようと思っていたのに。わけがわからぬうちに、肉体関係をもってしまう、これからどうしていいのかわからない。

この変態行為は果たして愛ゆえなのか。

「新しいの買うからサイズ、測るよ。腕上げて」

引き出しからメジャーを持ってくると、アンダーとトップを計る。

「乳首勃ってるだけで1〜2センチは大きくなりそうだね」

「は、恥ずかしい」

メジャーがトップに触れると、背がのけぞってしまった。

「こんなに重く育ってるのに、中学生がするみたいなスポーツブラじゃ形が崩れちゃうよ」

シャツ越しにまゆの胸を両手で持ち上げ、ゆさゆさと揺する。

「きれいな形なのにもったいない。ネットで注文するからすぐに届くよ」
ポチ。ポチと手慣れた様子で通販サイトで下着を選ぶ。ちらっと見ると、扇情的で、いやらしいデザインが多い。

「そつ、そんなのお母さんに見られたら……」

「これはうちに泊まる時用。普段用はもう少し地味なのも買っておくから」
涼が選んだ下着をつける自分を想像すると、くらくらしてきた。

「ここに穴が空いてるのもあるよ?」

そう言ってまゆの乳首にそつと触れる。

「そ、そんなの下着として意味ないっ!」

「下着にも色々用途があるんだよ」

全然会話が通じない。きつと買ったたらまた悪いことに使うに決まっている……。

まゆが怒っているのにも気づかず、涼はスマホでいくつか注文したようだった。

「注文したよ。明後日来るって」

ということとは、今日明日は下着なしということだ。

「下着がないと外行けない」

「うん。だから家で楽しもう。今日は金曜日だし、日曜には届くって。で、話は戻るけどき。お仕置き、期待してたよね？」

「あ……、し、してない」

もう言い訳できないほど、足の間が濡れている。

「せっかくだから、他の場所も測ろうか」

「えっ？」

「足開いて。割れ目は何センチかな」

「な、なんの意味が」

「ん、僕の入るか心配で。んーまあ慣れたら大丈夫だと思うけど」

濡れそぼったところへメジャーを当てると、これならいけるかと一人納得している。

あまりの異常な行為に、まゆがドン引きしているのも無視してあちこち計測している。恥ずかしいところを隅々まで、調べられ頭がおかしくなりそうだった。

「こんなちっちゃなとこに受け入れるの大変そうだね。入るけどさ」

「入らなくていい……」

「ふふ、かわいいな。ちよつと待って」

隣の部屋から一眼レフのカメラを持ってくる。

「え、写真なんてダメ……やめて」

もし流出したら、とんでもないことになる。

「大丈夫だよ。顔は撮らないし、パソコンにも移さないから。もう少しシャ

ツ上げて。お臍の上まで」

駄目なのに、命令されるとつい従ってしまふ。

もともとおとなしくて従順な性格ゆえ、上からものを言われると断れない。そのことも涼はわかっているのだろう。

おずおずとシャツを上げ、なにも履いていない剥き出しのそこを見せた。もう太ももまでぐつしよりと濡れている。

二人だけの部屋にシャッター音が響き、フラッシュの光がなにも身に付けていない下半身を照らす。

十一章　そして彼女は寝取られた

和也は、まゆの家の近くで待っていた。
今日は卒業式。また告白してよりを戻したい。

一方的に別れを告げられたが、まだ未練が残っていた。

しばらくするとまゆが通った。急に髪や肌もつやつやとして、妙な色気が出ていて付き合った頃よりきれいになっていた。

「まゆ！」

遠くに見えたまゆのほうへ行こうとすると、男と一緒にいるのに気づく。

——あれ、まゆのお兄さんじゃ。

一目見て、優しい穏やかなタイプでないのがわかる。いるだけで威圧感で人を萎縮させるオーラがある。

二人は恋人のように寄り添っている。目線や手の繋ぎ方、どう見ても兄妹には見えない。

——そういえば、再婚でできた義兄って聞いたような。まさかまゆとそういう関係なのか？

二人がまゆの実家に入るのをよろよろとついていく。

ただならぬ雰囲気を本能的に感じた。

——あの二人は一体……。

玄関に入る前、男がまゆにキスをした。

まゆが拒むような仕草をする。

「まさか、嫌がるまゆを無理やり……?」

別れた時もおどおどして、なにか様子がおかしかった。

母親にバイトを禁止され、服も買ってもらえないと言っていたが、別れてから急に垢ぬけた気がする。

二人が家に入ると電気がついて、しばらくすると消えた。家にいるのに、電気を消すなんておかしい。

和也は、庭から回ってまゆの家を覗いた。

西側の和室から、くぐもった声がある。

「荷物取りにきたただけなのに、駄目」

「まゆちゃん、我慢できない」

十センチほど空いた障子の隙間から、中を見ると薄暗い部屋の中で二人が重なり合って唇を吸い合っているのが見えた。

衝撃的な光景に、和也は立ち尽くした。

「やっぱり……!」

勉強が忙しいなどというのは嘘だった。

義理とはいえ、年の離れた妹に手を出すとは、なんという卑劣な男だろう。今すぐ部屋に入って止めてやりたいと思うのに、体が動かない。

「無理やりやられてるのか……」

そう思った和也の耳に、まゆの甘い声が届く。

部屋が薄暗くて、様子はよく見えないが、両足を開かされたまゆが男にのしかかられているのが見える。

あつという間に服を乱され、白い胸や太ももが露出していた。

首や、胸に唇を落とすたびに、まゆが媚びるような声をあげている。

男の手慣れた感じが一層苛立たしく、怒りが湧いてくる。

体中に手や唇で愛撫を施したあと、男がまゆの乳首を口に含んだ。

一度だけ自分も味わった場所だけに、衝撃だった。

「彼氏に吸われたのどっちがイイ？」

「あ、涼くん……涼くんがいい」

偶然聞いてしまった言葉はあまりに衝撃的だった。

どうしようもない屈辱と敗北感を感じた。

男は延々とまゆの体を焦らすように、撫でまわしたり、舐めたりしていた。

男の唇が腹を下っていく、まゆの恥ずかしいところに届く。

「んっ、あっ！　そこだめえ」

男の頭が邪魔で見えないが、舐めているのは間違いない。

まゆの声からして、相当感じているのがわかる。おそらく昨日今日の関係ではないのだろう。

男がまゆの体を知り尽くしている感じがした。

「かわいいね」

優しい声で、あやすようにまゆの胸を揉みながら舐め続けている。白い胸の形がゆがむほど強く揉むが、中心には触れない。

「涼くん……」

「触ってほしいの？」

「うん……」

言われたとおり、男がまゆの乳首を摘まむ。まゆの吐息が一層甘くなる。
「下と胸同時だと気持ちいい？」

「うん。涼くんの口好き……」

「あれ、持つてるから入れてもいい？」

「えっ、あれはイヤ……」

「少しだけだから」

「あっ……んん」

本気で拒んでいないのはすぐにわかる。

よく見ると、男がまゆの体に透明なシリコンでできたティルドを出し入れしていた。

奥に届くたびにのけぞり、腰を揺らして、男を誘うような媚びた声が響いた。

「どうしてほしい？」

「あん。口で吸って」

「どこを」

「こりこりしたとこ……」

さすがに淫語は言えないらしい。

懇願されたように、男がデイルドを出し入れさせながら、まゆのクリトリスを引っ張るように吸うと、悲鳴のような切ない声をあげて、足を震わせている。

サンプル版 終わり

義兄の狂愛 嫉妬と独占欲

発行日 : 2022 年 12 月 12 日

発行者 : 華月倫 (かづきりん)

サークル : 箱庭の楽園

(C) 華月倫 2022

初出 pixiv & ムーンライトノベルズ

連絡先 : mail edenofhakoniwa@gmail.com

Twitter @hakoniwa2552

フォロー頂きますと、無料ギフトコードのキャンペーンや、過去作の無料閲覧など特典がありますので、よろしくお願いします。